

〈書評〉

細野昭雄 著

## 南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち— ゼロから産業を創出した国際協力の記録

ダイヤモンド社 2010年

アジア経済研究所 北野浩一

### 1. はじめに

数年前に大学の3・4年生を相手に講義をしていて驚いたことがあった。その回のテーマはラテンアメリカと日本の経済協力についてであり、導入の部分に身近な話題として、スーパーなどで売られているチリ産サケの養殖には日本の経済協力が活かされている、ということを中心に話した。輸入サケの多くがチリ産だということは周知のことと思っていたが、授業後提出してもらった講義コメントには、自分たちが食べているサケ弁当やサケおにぎりの原材料が遠い南米のチリ産だとは知らなかった、というのが多数あり、さらに、日本の援助は橋や道路など金額の大きい投資ばかりで、そのような役に立つ技術援助をしているのは意外だった、というのが多かった。若い世代への政府開発援助(ODA)の正しい知識と、身近な食を含めたグローバル化の動きについての教育が不足していることを実感することとなった。

本書の「はしがき」にも記されているが、これまで日本の海外政府援助事業を行ってきた国際協力機構(JICA)は、自己の活動の成果を広くアピールする、ということには必ずしも積極的ではなかったといえる。たとえば、評者はチリの2010年2月末の大地震発生時に首都のサンティアゴにいたが、地震直後に米国や欧州、ロシア、そして中国といった国々は、素早いタイミングで大々的に援助を表明し、チリの新聞やテレビのニュースでとりあげられていた。しかし金額・内容ともに遜色のない日本の援助は、現地日本大使館からの日本人向け情報など限られたルートからの情報で知らされ、一般のチリ人に広く認知されたとは言い難い。自らの功績を声高にアピールしないというのは日本人の美徳である「謙虚さ」の表れには違いないが、外交的手段としてのODAの役割を考えた時には不

利であり、さらには当の日本人にも ODA 事業の効果についての正しい知識が伝わっていないとすれば、やはり問題であると思われる。

その意味で、本書は JICA の援助研究成果発表として画期的で貴重なものといえる。これまで、政府開発援助 (ODA) に関しては、啓蒙書、研究書、学術論文などさまざまなものが出版されている。しかし、それらは日本の ODA をわかりやすく、かつ中高生も含めた読者に興味を持たせるようなものになってはいなかった。本書は日本の公的援助プロジェクトを援助に携わった人に焦点をあて、長い時間軸で多面的なインパクトを探る「プロジェクト・ヒストリー」研究の試みの第一巻であるが、読み物としても、また援助のケース・スタディとしても興味深いものになっている。

筆者の細野昭雄氏 (現 JICA 研究所所長) は、ここで紹介するまでもなく日本のラテンアメリカ経済研究を率いてきた、この分野の第一人者である。多くの学術論文を発表する著名な研究者であり、長年にわたり ODA 政策立案でも主導的な役割を果たしてきたと同時に、行動力に富み、援助関係者、企業家、研究者に広いネットワークを有している。本書は、筆者の著作としては珍しく中高生も含めた一般向けの啓蒙書となっているが、ここでも筆者の研究者としての視点と、ODA に関わってきた長い経験が十分に生かされている。

## 2. 本書の構成と概要

本書は、7つの章から構成されているが、大きく2つの部分に分けることができる。まず前半の第1章から4章までは、日本／チリ・サケプロジェクトの歴史に関わる部分であり、第1章で準備期、第2章から第3章で事業化期、第4章で日本市場の開拓を描き、時間軸に沿って構成されている。後半の5～7章は筆者の関心であるサケ養殖業の産業構造、貧困層の所得改善への効果、技術移転といった点について分析されている。以下では本書の構成にしたがって各章の概要を見てゆく。

まず第1章では、1972年のサケ養殖事業の立上げの様子が描かれている。ここでは、予期せぬ困難に直面しながらもそれを乗り越えようとする関係者の努力が伝わってくる内容になっている。第2章では、サケ養殖事業に訪れた大きな転機について、日系企業の動きも交えて語られる。これまで数度にわたって卵の放流を繰り返していたが、発想を転換し、放流をやめ海水に設置した生簀のなかで成魚まで養殖する「海面養殖」へ転換したことが、プロジェクトのキーパーソン

ンの口を通じて語られる。ここでは進出した日本企業の役割にも注目している。

公的技術援助で難しい局面として、移転した技術が現地でどれくらい根付くことが出来るか、という点があげられるが、第3章では、サケ養殖事業の企業化の成功について、その中でのチリ財団の役割に注目して紹介している。チリ財団は、ベンチャーキャピタル的性格を持つ半官半民の機関であり、JICAのプロジェクトと手を組むことによって、事業化に必要な技術を独占することなく、広く情報を共有して正の外部性を生み出した。初期の輸出先のほとんどは日本向けであったが、第4章では、その影にも日本の政府と民間の協力が強く関係していたことを浮き彫りにしている。上記のチリ財団が事業化した企業を国際入札で買収した日本企業をはじめ、国産種苗供給能力や飼料開発と魚病対策といった技術支援を続けたJICA、そして日本貿易振興機構によるチリ企業の日本市場開拓支援である。

続く3つの章は、チリのサケ養殖業に関する分析にあてられている。まず、第5章では、養殖サケ産業の産業構造に関する考察がなされ、バリューチェーンとクラスターの形成という点から分析を行い、産業を理解する上で重要なポイントがわかりやすく解説し、チリの競争優位性となっているものに日本が導入した種苗生産や餌生産技術、および加工部門があることを示している。

第6章は筆者の主要な関心のひとつである地元住民への影響について考察がすすめられる。サケ養殖業が集中する地域の雇用、所得、インフラ、輸出額といった指標は、いずれも好転しているが、チリ中央部の有力都市での産業発展が大きく、所得もより上昇しているために、中央と地方の所得格差は拡大したとする。その上で、零細漁民の所得向上にターゲットを絞ったプロジェクトとして、その後開始されたJICAの貝類増養殖開発事業が紹介されている。

最後の第7章では、人的交流を通じた公的技術支援の重要性について実例を挙げて主張している。現在チリのサケ養殖事業に関わる主要プレーヤーの多くが、日本／チリ・サケプロジェクトに従事してきた人々であることが紹介され、本書を通じて事業の大変さを追体験してきた読者は感慨深い印象を持つのではないだろうか。筆者は、民間による産業人材の育成のみに任せていてはこのような創業時のリスクが高い分野では、一般的に過少投資となるが、公的な性格を有する本プロジェクトであるからこそ成し遂げた、という見解を示している。

### 3. 本書の意義と課題

本書の価値は、何よりもその読み物としての面白さにある。本書の「あとがき」

に『中高生にも読んでいただけるわかりやすさと、研究者の関心にもきちんと応えられるようにすることを心がけた』とあるが、その意図がよく伝わるスタイルになっている。サケ養殖事業の歴史を扱った1～4章では、プロジェクトに尽力する個人のドラマ性を前面に構成され、ページをめくるのが楽しみであった。その後の5から7章では、文体の読みやすさはそのままに、バリューチェーンやクラスター、イノベーションといった産業研究として研究が進められている新しいテーマについて丹念な調査がなされており、優れたケース・スタディとなっている。

ストーリー性を大事にすると同時に、関連する基本的な情報も伝える、という点で、各章の後に付された「ノート」の役割は大きい。これは、単にコラム的な登場する場所の案内にとどまらず、チリの風土と人々といった一般の読者が関心を持つテーマから、経済政策の概観や政治状況まで、最新の幅広い話題をわかりやすく解説している。評者の大学での学生の反応を見てもそうであったが、サケ養殖という比較的身近な話題からラテンアメリカの政治・経済に関心を持ってもらう、という動機付けとして非常に効果的と思われる。

これらをふまえた上で、やはり日本／チリ・サケプロジェクトの効果に関する分析については異論も多くある、という点についても触れるべきではなかったか、という印象を持つ。本書の第2章ではサケの回帰という当初の目的に失敗し「海面養殖」を開始したことを「逆転の発想」としてプラスに評価している。これにより世界に名だたるチリのサケ養殖業の発展に寄与したことは事実であろう。しかし、回帰サケ漁業と海面養殖サケでは産業構造としては全く異なる事業である。前者の生産主体が沿岸漁民であり、参入コストが低く小規模生産者でも従事できる産業であるのに対し、後者は下流部門である加工業、流通業まで支配する大規模垂直統合企業が生産の主体となる。JICAの調査報告書を見ると、プロジェクトの本来の目的が沿岸零細漁民の雇用機会の増大であったことがわかるが、もしサケがチリの河川に回帰していれば直接彼らの所得向上に寄与していたであろう。しかし、「海面養殖」では、事業ライセンスを有し生簀や加工設備、流通ネットワークを有する垂直統合型大企業の独占的利益となる。

援助の直接的受益主体が異なるというだけではなく、海面養殖事業に伴う沿岸漁民に対する負の外部性も指摘されている。評者は、チリ中南部の沿岸漁民に対して調査を行ってきたが、サケの餌原料となるアジやイワシ漁は、大企業が所有する大型船での沖合まき網漁が中心となり大量捕獲し、その結果近年沿岸漁業での水揚げ量が激減しているという意見が強かった。また、食べ残しの餌や加工工

場から出る残滓によって海洋汚染が深刻化し、最近では海底に蓄積するサケの魚病対策用の抗生物質による住民の健康被害も懸念されている。

漁獲高が減少し廃業を迫られる沿岸漁民にとって、サケ養殖業は新たな雇用先とはなりにくいという点も問題である。ノルウェーから導入された近代的な海面養殖方式では、給餌、運搬が自動化され海上で必要とされる労働は非常に少ない。雇用される労働者のほとんどは加工部門で、雇用は女性中心となり、不安定な労働条件のもと低賃金労働を強いられている。近年、チリでは低賃金の単純労働者や下請け企業からの派遣労働者のストが相次いでいるが、その中にはサケ養殖企業労働者も含まれ、政治問題化する危険もはらんでいる。

本書の最終章で触れられている技術移転についても賛否両論があろう。プロジェクトに関連していた公的部門のチリ人のほとんどが、サケ養殖産業を主導する貴重な人材となったことは事実であるが、日本の公的援助は国際的大水産会社の幹部技術者を養成するためのものではなかったはずである。民営化事業や規制産業において、監督官庁の担当者が、その後規制下にある企業の要職につくケースはしばしば見られ、チリの民営化の問題のひとつとしてあげられる点である。JICAのサケ養殖事業においては、公的援助で移転された技術や知識を有した人物が民間企業に移ることによって、公共性のある知識から、それを体得した個人とスカウトした企業の私的利益に変わったのではないかと見ることもできる。これは、日本と異なり労働市場の流動性が高く、また公共部門の労働待遇の低いことに起因していると考えられるが、人に体化されざるをえない公的技術移転の難しさといえよう。

以上、いくつか ODA 評価として課題となりうる点を述べたが、本書の問題というよりは、ODA による産業育成全般にいえる課題といえよう。援助として技術や機材を移転することはできても、被援助国の企業システムやさらには社会システムが異なればその定着の仕方も自ずとその社会に適応するものに変貌せざるを得ない。冒頭に述べたように、それを前提として、本書のように永年にわたる ODA の成果のプラスの側面を、わかりやすく伝える努力も必要であることは論を待たない。本シリーズの、ラテンアメリカを事例とした続巻の出版も待ち望まれる。

